

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 香油

## ——マタイ伝 26 章 6 ～ 13 節——

1995年10月15日

小池辰雄

未完成は無限性 一回限り 自分を全部献げる 未完成は無限 (詩) 「ベタニヤなるある女」  
ただ庄倒されているだけ

## 【マタイ 26】

6 イエス、ベタニヤにて癩病人シモンの家に居給う時、7 ある女、石膏の壺  
に入りたる貴き香油を持ちて、近づき来り食事の席に就き居給うイエスの  
首に注げり。8 弟子たち之を見て憤り言う『何故かく濫なる費を為すか。  
9 之を多くの金に売りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』10 イエス之  
を知りて言いたもう『何ぞこの女を悩すか、我に善き事をなせるなり。11 貧  
しき者は常に汝らと偕におれど、我は常に偕に居らず。12 この女の我が体に  
香油を注ぎしは、わが葬りの備をなせるなり。13 誠に汝らに告ぐ、全世界、  
何処にてもこの福音の宣伝えらるる処には、この女のなしし事も、記念とし  
て語らるべし』

## ● 未完成は無限性

素晴らしいキリストの言葉ですね。もう次元が違うんです。

マタイ伝 26 章のこここのところはマルコ伝 14 章にも同じように出ている。

「3 イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給う  
とき、或女、価高き混なきナルドの香油の入りたる石膏の壺を持ち来り、  
その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。4 ある人々、憤りて互に言う『な  
に故かく濫に油を費すか、5 この油を三百デナリ余に売りて、貧しき者に施  
すことを得たりしものを』而して甚く女を咎む。6 イエス言い給う『その為  
すに任せよ、何ぞこの女を悩すか、我に善き事をなせるなり。7 貧しき者は、  
常に汝らと偕におれば、何時にても心のままに助け得べし、然れど我は常に  
汝らと偕におらず。8 此の女は、なし得る限りをなして、我が体に香油をそ  
そぎ、預じめ葬りの備をなせり。9 誠に汝らに告ぐ、全世界、何処にても、  
福音の宣伝えらるる処には、この女の為しし事も記念として語らるべし』(マ



ルコ14・3～9)  
とある。

「福音の宣伝えらるる処には、この女のなしし事も、記念として語らるべし」

と、キリストは言われたんですが、ほとんどこれは一緒に語られていない。私も語りそこなっておりますけれども。なぜ、キリストはこういうことを言われたか。まあ、だんだんやっていきましょう。マタイ伝24・7からと、マルコ伝14・3からが相応ずるところの記事です。

「石膏」は「アラバストロン」と言いますが、それに入っているところの香油はインドの方からくる非常に高価なものです。

7ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油を持ちて、近づき来り食事の席に就き居給うイエスの首に注げり。

とある。マルコ伝の方は、

「3或女、価高き混なきナルドの香油の入りたる石膏の壺を持ち来り、その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。」(マルコ14・3)

「その壺を毀ちて」

と書いてある。壺をわることが非常に大事なことなんです。

「もう二度と使わない」

ということ、全部注いだわけです。

パウロが

「全き愛は罪を除く」

と言ったが、この女のしたことは正に「全き愛」なんです。

「壺を毀つ」

ということ、

「もう再びやらない」

ということ、全身的な愛をもって、尊敬の愛をもって、キリストに注いだ。

こういう全的な在り方が大事です。我々人間のすることはなかなか全的でない。

「全き」

ということとはただ量的な全きではなくて、やることが質的に全的でなくてはいかん。我々が普段やることでも、すべて質的に全的でなくてはいかん。たとえば、それが半ばで終わつたとしても、その質は全的である。何をするにしても、そういう全的ということが非常に大事なわけです。全身的に事をやること。本を読むのでも、仕事をするのでも、歌を唱うのでも、何でもかんでもすべて全的であることが大事です。

大詩人たちの書いているものを見ると、ダンテにしる、ゲーテにしる、正にそういった気魄が感ぜられる。また、女の方が台所で仕事をなさるのでも、すべて全的ということ。



量的には部分であっても、質的には全的という在り方が非常に大事なことです。本を読んでも、読んだ所を全的に読んでみると、読まない所までがちゃんともうそこに響いているわけです。我々のすること為すことがすべて全的であるということが非常に大事です。

「壺を割って注いだ」

「という女性は、本当に全存在的な愛をキリストに注いだ。それがこの「壺をわって」ということ。」

「もう再び致しません、できません」

と。とにかく、そういう意味において、全的ということが非常に大事なことです。

シューベルトの「未成交響楽」というのがある。しかし、あれはやはり全的なんです。むしろ、全的よりもうひとつ先の無限無量的なんです。終り無き在り方ということ。

「これででき上がりました」

というのはダメ。でき上がったら、それでお終いなんだ。未完成が本当なんだ。だから、シューベルトの未成交響楽というのは素晴らしい。ベートーベンの第九シンフォニーも「第十」がない。これもやはりベートーベンの魂の素晴らしいです。未完成が人間の本当の姿なんです。でき上がったものはそれでお終いだから、先がない。未完成は先がいくらでもある。私は詩を書きますが、これもやはり未完成の詩となります。我々のすること為すことはみな未完成です。未完成というのは無限性ということ、無限無量なんです。限りが無い。限界が無い。

### ●一回限り

マタイ伝26章にもどります。香油をキリストに全的に注いでしまった。「壺を割って注いだ」と、マルコ伝の方がはつきりとそのことが表れている。自分を全的に注いだ。それで何のかんのと理屈を言っている者には、キリストが、そうではないんだということを言っておられる。

12 この女の我が体<sup>からだ</sup>に香油を注ぎしは、わが葬りの備<sup>ほうむ</sup>をなせるなり。13 誠に汝らに告ぐ、全世界、何処<sup>いずこ</sup>にてもこの福音の宣伝<sup>のべつた</sup>えらるる処には、この女のなしし事も、記念として語らるべし』

この全的な注ぎ方をキリストが全的に受けとって、非常に喜ばれたから、こういうことを言われた。我々の在り方というものは——この女の人のように全的に自分という石膏を割ってしまう——この全的ということが大事です。一回限りです。

我々の集会も毎日が一回限りなんです。

「この次もまたある」

ではない。これが全的な集会のやり方です。

「まあ、この次もあるだろうから、今日はいいい加減に聞いておけ」



なんてダメだ、そんなのは。全的に聞かなければ。集会の予定は書いてあるけれども、予定はあまり気にしないわけです。全的は無限的、限りが無いということ。未完成、終りなき在り方が、私は好きなんだ。

いろいろな歌がありますけれども、歌をうたつても最後の一節は、余韻をのこして、歌わない方がいい。余韻じょうじょう々々というけれども、余韻というのはいい言葉だ。余韻のないものはダメなんだ、

「これでお終い」

というわけで。ミケランジェロは彫刻して、最後のところはやらない。いわゆる完成は本当の人間のすがたではないというわけです。もし、ある人が、

「それでは未完成ではないか」

と言ったら、

「未完成が本当なんだ」

と逆に言っておげなさい。「完成」というのは「お終い」ということです。お終いということとは、先がないということ。未完成は、先がいくらでもあるということです。何でも、お終いはダメですよ、

「これでお終い」

というのは。

だから、私は死なないです。死んだと思うような現象は実は、次の世界に往くということ。「往生」という素晴らしい言葉がある。

「小池先生は死んだ」

なんて言わないで、

「小池先生は往生した」

と言ってください。皆さんもどうぞ往生してください。次の世界に往くんです。これはヒルティがそう言った、

「死ぬことは隣の部屋にいくようなものだ」

と。さすがはヒルティだ。僕は「死」という言葉は嫌いなんだ。キリストは十字架に架かって、殺されて、いわゆる死んだ。ところがどっこい、彼は復活している。そういう熾んなる生命力です。キリストから

「永遠の生命」

をいただいているから、我々は永遠の生命だから、滅びることはない。本当にそれを魂で意識してくださいよ。

「魂之霊」は

「たましひ」

と読む。「霊」は「ひ」と読むから、「たましひ」と書かなくてはダメです。学校の先生もそ



これまで知っている人が果たして何人いるかね。

### ●自分を全部献げる

石膏の壺を割って香油をイエスに注いだ。この女のしたことは全的なんだ。

13 誠に汝らに告ぐ、全世界、何処<sup>いずこ</sup>にてもこの福音の宣伝<sup>のべつた</sup>えらるる処には、この女のなしし事も、記念として語らるべし』

「この女のなしし事」というのは

「この女の全的な愛」

ということ、キリストはこれをもの凄く喜ばれたわけです。ところが、弟子たちは、これを売ってどうのこうのと相対的な経済的なことを考えている。

日本は困ったものだね、経済大国で。経済的なことが先ず考えにのつかってくる。霊的なことではないんだ。日本人の今の魂の在り方が一番ダメではないかな。日本は精神的に一番今ダメではないかな。キリスト教界もすっかりしないとね。福音のためには男も女もしっかりと戦っていかねければいけないことをつくづく感じます。

香油の壺を割ってまでも注いだ。キリストはそれを非常に喜ばれた。すべて全身的です。全身的な、無限的なもの。今日は、そういう在り方をこのマタイ伝26章7節から13節までとマルコ伝14章3節から9節で、皆さんと一緒に学びたかったです。福音のために、キリストのために自分を全部献げるところの在り方。それは我々の努力ではない。上からくる力でできるんです。

神・キリストからくるところの光、力、生命、これに私は圧倒されて生きている。私は自分の信仰なんか問題にしてない。自分の信仰がどうだこうだなんて、そんなことを普通の教会や無教会で言うか知りませんが、我々はそんなことは問題にしない。ただキリストに圧倒されるだけです。

「神・キリストの光、生命、愛、これに圧倒されて生きています。自分の信仰でも何でもありません」

と、これが私の答です。また、皆さんの答だと思えます。我々は太陽の光を受けて生きている。これはもう、こつちが何かするからではない。窓さえ開ければ、魂の窓さえ開ければ、また肉体的な目さえ開ければ、太陽の光は我々に否<sup>いや</sup>でも応でも入ろうとしているのだから。

「戸を開けなさいよ」

とお天道<sup>てんどう</sup>さんは言っている。

「お天道さん」とはおもしろいね、「天の道」と書く。我々、日本人は道の民である。柔道、剣道、弓道、茶道、華道という。これはみな道なんです。全存在でもって体当たりしていく、歩く。それが道なんです。道は歩かなかつたら、どうしようもない。道を自分で足で歩くと、これが「路」ということになる。路は足編に各と書く。各々の足で歩くと路という。



我々は道を歩くと、そこに一人びとりの路ができる。その路はみな一人びとり、別々です。それを「道路」という。路がなければダメです。

私の書く詩は決して個人的な意味でなくて、ダンテは

「自分の詩は復讐だ」

と言ったが、正にダンテと同じです。悪に対するところの断然たる戦いの詩です。サタンとの戦いの詩です。悪の親玉はサタンだから。キリストは曠野でサタンと戦って勝ちたもうた。

### ● 未完成は無限

マルコ伝14章のこの女性の全的な在り方。愛をもつて全的に自分を、壺を割ってまでもキリストに注いだ。キリストは本当にこの女性の全的な在り方を喜ばれたわけです。だから、

「福音の宣伝えらるる処には、この女のなしし事も、記念として語らるべし」

と言われた。しかし、なかなか記念として語らないのが多い。とにかく、我々はすべて、すること為すことが全的、無限的であることが大事です。それは質的に全的であって、量的ではない。質的な全的、それは無限ということなんです。地上で「全く」なったらダメなんです。地上は「未成交響楽」、未完成が本当の姿です。ということは、

「未完成は無限」

ということなんです。そういう気持で、あなた方は自分のなさることをやってごらん。楽しくてしょうがないから。

「これでいい」

なんていうところはないんだ。楽しくて上から力が来て、しょうがない。靈感が来てしょうがない。

マルチン・ルターは

「聖書はまだかけらだ」

と言った。聖書はでき上がったものかと思つたら、まだこれは「かけら」にすぎない。神さまの言葉や行為はこれに載り切れないんだと。「載りきれない」ということはヨハネ伝(21・25)にも書いてある。

「<sup>25</sup>イエスの行い給いし事は、この外<sup>ほか</sup>なお多し、もし一つ一つ録<sup>しる</sup>さば、我おも

うに世界もその録<sup>しる</sup>すところの書を載<sup>の</sup>するに耐えざらん」(ヨハネ21・25)

と、凄いいことが書いてある。まだキリストは我々を通して、言つたりしたりすることを続けておられるわけです。我々一人びとりを通してキリストが動いている。霊の世界はそういう世界なんです。

「聖書の中はまだキリストのかけらにすぎない」

と、ルターはいいことを言った。



シューベルトだのベートーベンだの、とにかくドイツには凄いのが出てくる。大体、日本人はまだ浅いね、深みがたりない。その深みの世界では、やはりドイツが一番だろうな。また、イタリヤには別なよさがある。フランス人はなかなか直観力がいいそうだ。イギリスは中間だな。ロシアにはちよつと凄いのがいる。それとはまた別な味で、デンマークのアンデルセンのお伽話はいい。『絵のない絵本』という有名な本がある。あれは夢のような本だ。

日本で出るようないい加減なものひとつも読む必要はない。一流のものだけを読めばいい。ダンテの『神曲』は素晴らしい。私は世界の詩で一番素晴らしいのはやはりダンテの『神曲』だと思っている。地獄・煉獄・天国。その点ではゲーテもかなわない。何でもいから、皆さんは楽しくやってください。何でも、楽しく打ち込むことだね。ひとつのことに全身的に打ち込むと、それは本当に楽しい。

### ●(詩)「ベタニヤなるある女」

私のつくった「ベタニヤなるある女」という歌がある。

(召団讃歌 A 28) 「ベタニヤなるある女」

(1981年8月15日作 アイルランド民謡「庭の千草」の曲で)

- |   |                                |        |
|---|--------------------------------|--------|
| 1 | ベタニヤなる                         | ある女    |
|   | <small>アラバストロン</small><br>石膏壺を | うち割りて  |
|   | <small>シラベ</small><br>主の首に     | 心こめて   |
|   | ナルドの香油を                        | 注ぎけり   |
| 2 | 主の弟子どもは                        | これを見て  |
|   | <small>もつたい</small><br>勿体なやと   | 憤る     |
|   | 「それを売りに                        | 貧者のため  |
|   | 施しごとを                          | なすべきに」 |
| 3 | 主は言い給つ                         | 「この女   |
|   | <small>ほうむ</small><br>葬りの為     | わがために  |
|   | 涙ながら                           | 注ぎたるぞ  |
|   | 我はほどなく                         | 別れ往く   |
| 4 | まことに告げん                        | 全世界    |
|   | いずこなりとも                        | 福音の    |
|   | 伝えらるる                          | ところにては |
|   | 憶えらるべし                         | この女—」  |

我々自身の存在がこの「香油」である。かぐわしき油である。キリストに本当に喜ばれるところの油になる。



●ただ圧倒されているだけ

イエス・キリストは掛け替えのない方です。キリストに圧倒される。「信じています」なんて私は言わないんだ。私はただ圧倒されているだけです。すぐ

「信仰、信仰」

と言う。二言めには「信仰」と言う、

「信仰を強くしなくては、深くしなくては」

と。私は皆さんにそんなことは言わない。

「キリストに圧倒されて生きている」

と、それだけののはなしです。これは大変なものだ。太陽の光を受けているようなもので、キリストは我々を圧倒しながら、我々を本当にもの凄く立たしてくださる。

「信仰と行為との関係はどうだ」

なんてことはひとつも考えない。昔は、そんなことがよく言われたものですけれども。信仰がサムシングだと思う。「冗談ではない。私は何もありません。」

「信なき我をあわれみたまえ」（マルコ9・24）

という、あれなんです。

「信なんかありません。あなたの憐れみさえくればいいんです」

と。福音書を読んで、キリストの言葉、行為に、全キリストに圧倒されて読んでいけばいい。註解書も何もいらぬ。註解書なんか読むと、逆にうすくなってしまふ。皆さんは、身体でもって福音書を読みなさいよ。

何といつても、新約聖書の中心はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書です。この福音書がなかったら、新約聖書はダメです。黙示録はまた別な意味で大事なところですよ。神の新天新地への大希望を与えるところだから。

人生は地上だけではない。その先の方が大変なんです。その先の方が、いわゆる「天国篇」が素晴らしい。

「霊的生命をいただく」

と、パウロがコリント前書15章で書いているとおりです。

ローマ書は大変なところだ。ローマ書はよく読みなさいよ。旧約ではイザヤ書です。イザヤ書というのは凄い。旧約のイザヤ書は、その中に全福音が入っている。聖書くらい楽しい本はない。

ダンテの『神曲』、ユゴーの『レ・ミゼラブル』。聖書なくしてはああいう素晴らしい文学は現れない。

